

「イスラエル建国史」

41 独立闘争（最終回）

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

独立直前の厳しい状況

イギリスは、委任統治政府の権限移譲をすることなく撤退準備を進め、安全保障面も英官憲の居住区及び、部隊の撤退ルートを確認するだけとなった。第7代高等弁務官サー・アラン・ゴードン・カニングham英陸軍中將は、積極的な活動を本国政府に意見具申ししていたが、すべて拒否され、結局アラブ不正規軍と正規軍の侵攻を許すことになった。

1948年4月初め、戦乱が全土に拡大するなか、シオニスト全体会議（ゼネラル・カウンスル）と民族評議会（ヴァアド・レウミ）は、独立に備えた国家機構、即ち議会と政府に相当する人民評議会（37名）及び人民行政委員会（13名）を設立し、更に独立宣言草案作成委員会（5名）を設け、ベングリオンを中心に草案をまとめることになった。

5月10日、ユダヤ機関執行部政治局長代理ゴルダ・メイヤー女史がアラブ人女性に身をやつし、アラブ専門家のエズラ・ダニンを伴ない、ヨルダン川を渡りアンマンへ向かった。トランスヨルダンのアブドッラー王に、命懸けの直談判に行くのである。メイヤーは王と面識があった。前年11月、ガリラヤ湖南端のナハライムで、執行部と王が秘密会談を行なった。その時王は、国連で分割決議が採択されれば、ユダヤ人国家を受入れ、アラブ側に割当てられた地域をトランスヨルダンに編入する、と言った。しかし王の態度は変り、アラブ5ヶ国の正規軍で構成される、侵攻軍の総司令官に就任するのである。

アブドッラー王は、情理を尽した説得

に耳を傾けず、「ユダヤ人は何故そんなに急いで国造りをする」と言い放った。

5月12日、人民行政委員会が、ハガナの作戦部長イガエル・ヤディン（独立後の第2代参謀総長）を招いて、状況判断を求めた。

ヤディンは、アラブ正規軍の侵攻は必至であり、しかもその軍勢力ははるかにまさる。格段に劣る我々には、敵の主攻域に全力を集中して戦う以外に方法はないとし、「アラブが全兵力を投入してくれば、彼等が相当に優勢になる」と述べた。アラブ不正規軍によって交通線が



ゴルダ・メイヤー女史

寸断されており、迅速な全力集中が可能かどうかは判らなかった。行政委員長になっているベングリオンが「持ちこたえて、敵を撃退することが本当に可能なのか」と問うた。ヤディンは人間の敢闘精神には限度があると前置きし、「徹底的な動員と訓練、海外からの資材確保があれば、撃退できる。但し、甚大な損害をこうむり、ショックも大きいだろう。我々は覚悟しなければならない」と結んだ。

苦節 52 年後の国家独立

独立宣言は、委任統治の終了と同時に（5月14日深夜）に出すのが筋であるが、この日の夜は既に安息日入りになるので、その前に出すことになった。

ところが、国連安保理が5月14日午前11時（ニューヨーク時間）に開催され、分割決議履行の延期を話合うことになった。延期に

【これまでの流れ】

1947年11月の国連決議でパレスチナ分割案が採択され、ユダヤ人国家の建設が国際社会によって正式に承認された。しかし、それをアラブ社会が手をこまねいて見ているはずがなかった。アラブ側は、ユダヤ人社会のせん滅をはかるためにアラブ高等委員会傘下の組織を使って各地でテロを起こし、パレスチナ全土が騒乱状態になった。次に、アラブ解放軍といったアラブ不正規軍によるユダヤ人開拓村へのゲリラ攻撃が始まった。そして、その後に待ち受けるのは、アラブ諸国の正規軍による本格的侵攻であった。

なったら、建国の機会がいつになるのか判らなくなる。この情報を得たアバ・ヒレル・シルバー（当時ユダヤ機関アメリカ部会長）は、ベングリオンに独立宣言の1時間前倒し、即ちニューヨーク時間で午前10時（現地時間午後4時）を勧告した。

そして運命の5月14日がきた。最後の高等弁務官カニングham中將は、エルサレムの南方高台にあるガバメントハウス（高等弁務官事務所、現国連事務所）を出発、北へ向かった。エルサレムは5月8日から一時停戦が成



アブドッラー王

立して、小康状態にあり、中將一行はエルサレムとラマツラの間点にあるアタロット飛行場に到着し、ここで飛行機に乗るとハイファへ飛んだ。

同じ頃、人民評議会メンバーがテルアヴィヴ市の市立博物館に集まり、ベングリオンらがつくった独立宣言草案を検討し、修正作業を行なった。その最中に届いたのが、エチオニアブロック陥落の悲報であった（ヘブロンの大虐殺事件後、その付近につくられた四つのキブツ。前



イスラエル建国宣言

から不正規軍の攻撃にさらされ、今回トランスヨルダンの正規軍であるアラブ軍団に攻撃されたのである。更に、エルサレム旧市のユダヤ人居住地に残留する2,500名の命も風前の灯であった(ここは5月28日に住民代表がアラブ軍団に降伏した)。

午後4時過ぎとなり、緊迫した状況のなかで、式典が始まった。ベングリオンが司会し、「只今より、評議会の第一読会で承認された、イスラエル国の建国宣言を読みあげます」と告げ、淡々と読みあげた後「ユダヤ人国家の建国の書を起立して承認願います」と言った。全員が起立した。その後ラビのフィッシュマン・ハコーヘン師(初代宗教相)が立上り、「我々を今日まで生かし給い、この時節を迎えることを可能にされた主、我等が神、天なる王に祝福がありますように」と祝福の言葉を述べた。その後議長は、1939年白書(マクドナルド白書)の無効宣言を読みあげ、全員一致でそれを認めた。それから議長が独立宣言書に署名した。続いてゼーブ・シャレフ官房長が、評議会委員の名前をヘブライ語のアレフ・ベット順に読みあげ、熱烈な拍手が続くなか、各委員が壇上にあがって署名した。エルサレムはアラブの包囲下にあり、脱出できない委員のため、署名用の余白が残された。

署名が終ると、ベングリオンは「イスラエル国が誕生しました。これを以て本会議を終了します」と述べ、全員が起立し、正式に国歌となったハティクバ(希望)を斉唱した。ヘルツェルが夢見たユダヤ人国家は、52年の苦節、激動の時代を経てここに誕生した。

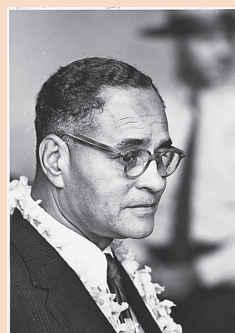
アラブ正規軍の侵攻

ハイファに到着したカニンガム中将一行は、英地中海艦隊所属の軽巡ユライアウス号に乗り、5月14日24時、ハイファを去った。かくして28年近く続いた英委任統治は終り、同時にアラブ正規軍の侵攻が始まった。北からレバノン軍、北東からはガリラヤ地方ヘシリア軍とイラク軍、東のウェストバンク方向からアラブ軍団(トランスヨルダン軍)、そして南からはエジプト軍が2本のルートで北上した。まさに三方向からのはさみ撃ちである。

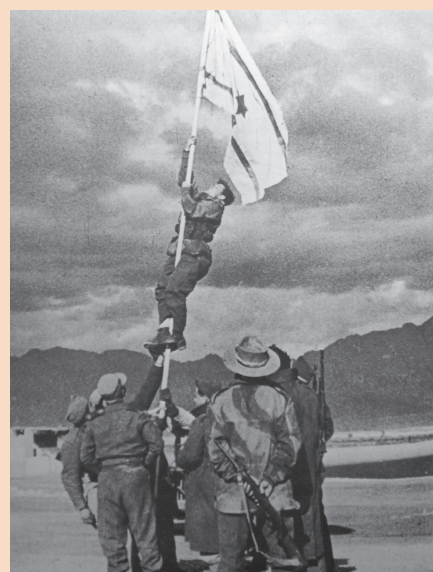
イスラエルが独立宣言を出した後の5月15日午前0時11分(ワシントン時間5月14日午後6時11分)、トルーマン大統領が新生国家イスラエルの暫定政権を承認する旨を発表した。(その2日後ソ連は、イスラエルを国家として承認した。アメリカが同じレベルの承認をするのは、1949年1月31日である)。当時ワイツマンはニューヨークに滞在中であったが、5月17日暫定政権の議長(大統領)に任命された。それを知ったトルーマンは、5月23日にワイツマンをワシントンに招き、国家元首に対する礼を以て迎えた。アメリカの好意はここまでであった。1947年12月5日から武器禁輸を実施し、イスラエルに対し軍事上経済上支援しなかった。武器を売ってくれるのはチェコスロバキアだけで、あとはスクラップ業者から廃棄処分同様の兵器を購入し、修理して使用せざるを得なかった。

5月26日、法と行政令第1号第18項に基き、イスラエル国防軍創設令(政令第4号)が出され、4日後に国軍が誕生した。この第4号は、私兵の存在を認めない。国防相を兼任するベングリオン首相は、自国の共闘武装勢力といえども容赦しなかった。多量の武器弾薬をフランスから運んできたイルグンのアルタレナ号は、同組織が引渡しを拒否したので、6月22日に撃沈し、独自に作戦行動をとる精鋭のパルマッハを解体し、軍の統一を厳守した。

孤立無援の中必死の防戦で戦況は徐々に好転し、7月から反撃に移るまでになった。その反撃戦は1949年3月10日を以て終る。この日軍はエイラートまで進出し、分割決議の割当て地域を確保したのである。



ラルフ・バンチ



独立戦争終了

国連加盟を認められたイスラエル

ロードス島で始まった、ラルフ・バンチ国連次長を仲介者とする休戦の間接交渉は、エジプト(1949年2月24日)、レバノン(同3月23日)、トランスヨルダン(同4月3日)、そしてシリア(同7月20日)との休戦協定となって結実した(イラクは部隊を撤退させただけである)。バンチはこの功績によりノーベル平和賞(1950年)を授与された。

かくして、20ヶ月に及ぶ独立闘争は終結し、イスラエルは戦費5億ドル、死亡6,000人、負傷5万という大きい犠牲を払って、国の独立を守り抜いた。そして1949年5月11日、国連総会はイスラエルの国連加盟を認めた。イギリスも翌年4月27日にイスラエルを国家として承認した。一方、パレスチナ側は、ウェストバンクをトランスヨルダン、ガザをエジプトに占領され、独立することはなかった。

【完】

※今月をもちまして「イスラエル建国史」は終了いたします。長い間、ご愛読いただきまして、ありがとうございました。

次回より、アーノルド・フルクテンバウム博士の「メシア的キリスト論」の連載を開始いたします。ご期待ください。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

1937年長崎県生まれ。

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。

現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書:『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

